
今願いが叶うなら～loveレター～

宇佐美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今願いが叶うなら〜loveレター〜

【Nコード】

N0585A

【作者名】

宇佐美

【あらすじ】

6歳のナナ、15歳の流星。年上の彼には彼女がいて…二人は一緒に空を飛ぶ約束を交わす。ナナの幼い恋の物語。

「こんにちは。君は誰？」

「：ナナ。お兄ちゃんは何してるの？」

「絵を描いてるんだ」

「きれいなお空の絵」

これが6歳の私と15歳の流星お兄ちゃんとの一生忘れられない出会いだっただ。

「：っう、うっ：ううぐう」

「ナナ！」

「ママ！」

「大丈夫なの？痛くない？」

「いたいけど、お姉さんだからだいじょうぶ」

「そう偉いね。それでね、ナナしばらく病院にいくちやいけないんだって」

「うん。ナナここだけがなおす」

あの時私はバランスを崩して自転車ごと倒れてしまい、右腕と肋骨を折って入院しなければならなかった。

入院はなかなか楽しいものだった。

同年代の子供も何人かいて遊び相手に困る事もなかった。

「もーいいかい？」

「まあーだよ！」

今日はおくればをしている。

ナナはどこに隠れようかキョロキョロするとドアの開いている部屋に入る。

「もーいいかい？」

「もーいいーよー！」

部屋では一人少年が絵を描いていた。それはとっても綺麗な青い空だった。

少年はナナに気づいて優しく笑いながら声をかける。

「こんにちは。君は誰？」

「…ナナ。お兄ちゃんは何してるの？」

「絵を描いてるんだ」

「きれいなお空の絵」

「ありがとう。僕は『流れ星』って書いて流星」

「りゅーせー、お兄ちゃん」

「…やーん！ナナちゃーん！どこー？」

「あっ！かくれんぼのとちゅうだった。」

ナナはドアまで行ってから一度振り返る。

「またきてもいい？」

もう一度振り返る。

「お兄ちゃんこんどナナの絵もかいてくれる？」

「いいよ」

「ありがとう。またあしたね」

「また明日」

トントン

「やあナナちゃん来てくれたんだね」

「うん。お兄ちゃんとお友達になりたいから」

ナナはモジモジしながら顔を赤らめる。それを見て流星は微笑む。

「僕たちは友達だよ」

「ほんと？」

「絵を描いてあげるって約束しただろ？」

流星が今日も空の絵を描いてる事に気づいた。

「いつもお空の絵かいてるね」

静かに空を見上げる。質問には答えなかった。

「ナナちゃん何して遊ぶ？」

「うとねーお外いきたい」

当時6歳の私から流星お兄ちゃんを見てもどこが悪いのか全く分かってなかった。

時々何らかの点滴をうつてるのは目にしたが、包帯をしている訳でも車椅子でもなかった。外に出る事は少なかったように思う。

「はい、プレゼント」

「わーい！お花のかんむりだあ。流星お兄ちゃんありがとう」

「また作ってあげるよ」

「ほんと？わーい！ナナうれしい」

「お兄いーちゃん」

びよこつと、顔を覗かせる。

屈託のない笑顔。ところが流星はベットに寝たまま起きあがろうとはしない。

「ナナちゃん：今日起きあがれそうにないからみんなと遊んできなよ」

「…」

パタパタパタいきなり部屋を出て行ったと思ったら何かを抱えて戻って来た。パタパタパタ

「っはあ、っはあ」

「？」

手に持ってきたのは、絵本と可愛い花。

「お花」

「ナナちゃん怪我してるんだからあんまり走っちゃダメだよ」

「エヘヘーここみて！」

指さしたのは花びらの先。

そこには小さいテントウ虫と少し大きなテントウ虫の二匹。

「かわいいねえー」

「何で戻って来たの？」

「だってお兄ちゃん一人だとさみしくなっちゃうから」

「…優しいね。ナナちゃんは淋しい？」

「…うん。でも、流星お兄ちゃんといっしょだからがんばれるんだ」
声が震えて泣きそうになっていたけれど、流星が優しく頭を撫でる。

「絵本よんであげるね」

楽しい時間だけが流れていく。

「りゅーせーお兄ちゃん！」

ドアから顔を覗かせる。
部屋には先客がいた。

「こんにちは。あなたが『ナナ』ちゃん？」

「…あ」

流星を探すようにナナは病室を見回す。

「お兄ちゃんどこ？」

「流星？今来るから、こっちでジュース飲んで待ってよっか」

「…うん」

小さく返事をしたが、内心泣きわめきたくてしかたがなかった。黙って彼女の隣に座ってジュースを飲む。

彼女は笑顔がとても素敵な人だった。

それが余計に泣きたくなった。

しばらくすると流星が点滴をうちながら戻ってきた。ガラガラッ

「実菜子、ナナちゃんも」

「きちゃった。退屈してないかなって思って本持ってきたよ」

「サンキュー」

私だけが入り込めないものを感じた。

「ナナちゃんアメ食べる？」

実菜子お姉ちゃんは悪くない。

頭では分かっているけど心の中がギュッって苦しくなる。だから、素直になれない。

「：いない」

首をめいっぱい振る。

「？」

耐えられなくなって、部屋を飛び出す。

パタパタパタ流星は走って追いかけようとするが苦痛に顔を歪め、胸を押さえる。

「ナナちゃん！：うっ」

「流星！大丈夫？」

「ああ：はあ」

パタパタパタその日は自分のベットで泣いた。

涙が止まらなかったから目が取れてしまうんじゃないかと思うほどで、頭が痛くなった。

次の日顔を洗おうと鏡を見ると瞼が重くて、お見舞いに来たママが驚いてた。

さらに次の日も流星お兄ちゃんのところには行かなかった。

そしたら、夜こっそり流星お兄ちゃんが遊びにきてくれた。

二人で窓の外の夜空をみる。

キラキラしていて、ちっちゃな宝石を散りばめたみたいだった。

「ナナちゃんの夢って何？」

「うーん…およめさん、かな」

ナナは少し照れて、顔を赤くした。

「でもね、絵本作る人にもなりたい！」

「絵本？」

「うん！絵かいてて楽しそうだから…流星お兄ちゃんは？」

遠慮がちに流星に目をやると、儂く笑う。

「そうだなあ…空を飛んでみたいな。気持ちいいだろうから」

ナナは星の煌めきを目に焼き付けながら黙って聞く。

流星の横顔がとても淋しそうでナナはちよつと悲しくなった。

「ナナが流星お兄ちゃんをお空につれてってあげるよ！」

「ありがとう」

やつと笑ってくれた気がした。

「ほんとだよ！風せんを手にいっぱいもってナナと流星お兄ちゃん
で風にのるの」

「楽しそうだね」

「うん！ナナとっても楽しみ」

「僕も楽しみだよ」

次の日からさっそく私はママにお願いして風船を一袋買ってきても
らった。

「ナナ…何してるの？ママにも見せて」

「みちゃダメ」

流星だけに見せたかったのでママには隠す。

画用紙の上を色鉛筆が滑り次々と円を描く。

色とりどりの風船で空を飛んでいるナナと流星の絵。

「♪」

手には二人で空を飛ぶ絵とカラフルな風船を握り締め流星の病室へ
と向かう。

パタパタパタ病室前まで行くと看護婦さんや人の往来が激しかった。

だが、ナナは小さかったので間をすり抜けて難なく潜り込めた。

「流星、お兄ちゃん？」

「ナナちゃん、入っちゃダメよ」

看護婦さんがナナを捕まえようと手を伸ばす。

「イヤァ！お兄ちゃん！！」

ベットまで行くと流星はナナの声に気づいて目をうつすら開ける。

「…ナナ…ちゃん？」

「ナナここにいるよ！」

椅子によじ登り流星に顔を近づける。

「ごめんね…約束守れ、なかった」

「…っうん。ナナね、絵かいてきたの。みて」

「上手だね…ごめんね。僕が先に空を飛んでくるよ」

既に流星の目は閉じていた。それを見て、ナナは首をめいっぱい振る。

「やあーだやだやだ。いっしょになってやくそくしたんだもんっ」

「ごめんね」

「お兄ちゃんのうそつき！！」

「…ナナちゃんは…じ…自分の夢を、叶えて…」

一筋の涙が頬を伝い流れる。

ピーーーーーッ走った。ひたすら走った。息ができなくなるくらい。

「ふっ…う…っぐっう…んゝ」

「みいーつけた」

実菜子がナナの後を追いかけてきてくれた。

「手出して」

小さな両手を出すとカラフルな風船を渡す。

「風船をたどったらナナちゃんを見つけちゃった。大切なものなんでしょ？」

「流星の夢はね…絵本を作って子供たちに読んでもらう事だったの」
「ナナと同じ」

「そうだね。流星は自分みたいな病氣してる子供たちを元気づけるような絵本作るんだって：言ってた」

実菜子も泣いた。

励ますようにナナは風船を膨らませ始めた。それを見て、実菜子も同じようにした。

「ナナ夢かなえる：流星お兄ちゃんのぶんまで」

ナナの夢を乗せた風船は空高くどこまでもどこまでも飛んでいく。空にいる流星に届くくらいに。

（13年後）『翼をください』という病氣を抱えた少年と少女が風船で世界中を旅する絵本が出版された。

表紙は青い空。

最後にはこう書かれている。

『世界中の子供たちへあきらめず願い続ければいつかは夢が叶う』
そして、もう一つ。

『貴方は流れ星になったけれど、ずっと忘れない。

貴方と過ごした日、触れた手の温もり、内緒話をした日の夜空。

私は貴方が好きだったから』幼い頃の恋と呼べるか分からない恋への、これが：最初で最後の：ラブレター

(後書き)

＊花のように＊に続きもどかしい恋心を描いてみました。感想などいただいたらすつごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0585a/>

今願いが叶うなら～loveレター～

2010年11月10日10時43分発行